

深イ〜話!

No.40

—「究極のスープ」 鈴木紋子(湘南教育研修センター副理事長)—

昭和五十年ごろ、鎌倉の荒れた中学校へ赴任した時のことです。

皆からゴムまりをひどくぶつけられるなどのいじめに遭い、しゅんとしている一年生の子がいました。

私は生徒指導担当として

「先生がついているから頑張りなさい」と励ましてきましたが、三年生になるとあまり姿を見かけなくなりました。

進路指導の行われた十二月、彼の母親が私の元に来てこう言いました。

「うちの子は休みが多く、点数が悪いからどこの高校も受けられないと担任に言われました」

その子はとても育ちのいい子だったのですが、ある日級友からお菓子を万引きしてこいと命じられました。学校へ行くとまた何を言いつけられるか分からないから、次第に足が遠のいてしまったというのです。

自責の念を覚えた私は、ある私立高校まで行って事情を話したうえ、

「受験までに必要な勉強の基礎を、全部私が責任を持って教えておきますから、受験させていただきませんか」とお願いし、以来二人三脚で猛勉強の日々が始まりました。

周囲に気づかれぬように暗くなった夜七時頃に彼の家に出掛け、英国数の基礎からみっちり三時間教えては十時半の最終バスで駅へと向かう。

電車を降りるとタクシーは一時間待ちの行列です。

仕方なく夜道を45分かけて歩き、12時過ぎに帰宅する日々が続きました。

彼は高校に無事合格し、卒業後はイタリア料理店で働くようになりました。

そのころ、我が家では主人が胃を全摘し、肝臓がんも併発するなど、闘病生活で体はひどく痩せ細っていました。

私はいろいろなスープを作っては主人に飲ませるなどしていましたが、私自身も疲労からくるたびたびの目眩めまいに悩まされていました。

前述の教え子が訪ねてきてくれたのは、そんなある日のことです。

「ご主人が病気と聞いて、チーフにスープの作り方を習って持ってきました。これ一袋で一食分の栄養がとれます」と一抱えもあるスープを手渡してくれたのです。

私は感激のあまりしばらく何も言葉が出ず、「これが本当の神様だわ」とわんわん声を出して泣いてしまいました。

その後も彼はスープがなくなる頃になると家を訪ねてくれ、おかげで余命三ヶ月と言われた主人が三年も生き長らえることができました。

私はこのスープを「究極のスープ」と呼んでいます。人間同士の世の中、お互いに尽くしあってやっていたらどんなにいいだろうと思ったことでした。

